

# 安保法の来し方行く末

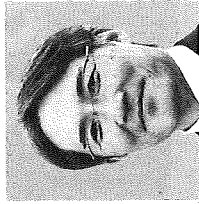
週のはじめに考える

その後  
して自衛  
代内閣は  
憲法九条  
を違憲  
それを  
倍前内閣

世の中はさまざまに「集会」が催されている。趣味から学術的・専門的なものまでテーマはいろいろだ。もっぱら身内の集まりも、社会にアピールすることを目的とした運動色が強いものもある。憲法では、こうした集会を開くこと、参加することの自由を保障している。それは、社会にいま伝えたいという思いで、集いを通じて新しい知識情報に接し、自分を高めたいとの思いの交差する貴重な機会だからだ。コミュニケーションの合意形成に寄与することも期待されており、社会を維持発展させるための装置の一つでもある。

とりわけ、こうした集まりが公共性を帯びたとき、例えば一般公衆を対象に開かれたり、公共的施設を利用したりした場合などは、単に公権力が人の集まりを邪魔しただけではなく、きちんと集会が行えるようサポートする役割を担う必要がある。国や自治体が運営する施設を、安く料金を借りられることもその一つだし、時には公的機関が財政的に支援したり、その集会を意図的に邪魔しようとする者から、警察などの適切な警備で守ったりすることもある。これも民主主義の維持経費だ。

昨今、特定の集会に反対する抗議活動が激化して、両者が衝突し現場が騒然としたり、追悼の場において静寂さが損なわれたりするなどとして問題となる事例が増えている。さらにはこうした混乱を理由として、おおもとの集会や催しが中止に追い込まれるなど、大きな影響が生まれている。八月六日の広島は、静かに平和を祈ることが暗黙の了解だったが、近年、拡声器などを使った街頭活動が活発化し、市は静穏維持を目的とした条例を制定するに至った。九月一日



山田 健太  
た けん  
やま た  
専修大学教授

## 時代を読む

# 集会はだれのために

の関東大震災・朝鮮人虐殺の追悼式を巡っても物々しい警備が不可欠な状況が続いている。

「表現の不自由展」を巡る衝突行動や脅迫行為による中止も、根は同じだ。これらからわかるのは、自分の主張と異なる言動を「潰す」ために、暴力行使を含む対抗的な言動がなされ、現場の混乱を収めるためには警察が必要とされている実態だ。その「攻守」は、いわゆる保守・リベラルがテーマによって入れ替わる状況も見られる。

私たちが集会の自由を市民的自由の中核として大切にしてきたのは、そこが「伝言学」の場たり得るからだ。互いに多様な価値観を知り、自分の主義主張と異なる意見に耳を傾け、考えることにこそ集う意味がある。集会を開く者も、それに反対する者も、そして何よりもそうした場を守っていく責務を負う国や自治体が、こうした集会の意義をきちんと理解することが、混乱解決の第一歩だ。

追悼の場で主賓が心のこもっていないメッセージを読んだり、慣行に逆らい追悼文の送付をやめたりすることが、こうした場の形成を壊すことを後押ししてはいないか。警備の責務を負う者が妨害行為を見て見ぬふりをすることで、誰かの学ぶ場を奪ってはいないか。しかも、こうした集会が面倒ごとを引き起こすとの空気が広がれば、民間の施設でも人が集うことがはばかれるようになる。

異質なものを容れず、集まることすら億劫になる社会は、救いや判断が難しいものを切り捨てることにつながっていく。それは周知ではなく放棄そのもので、いまのコロナへの向き合い方にも重なっている。



新型コロナウイルスの接種の抽選並ぶ並書ら8月28日、東京

新型コロナウイルスの種に若い世代は慎重だ。三十代の接種率が伸び悩む。若者が感染対策に消極的な意見が一時、独り歩きした。ところが、現実には打ち打てなかった。東京都が八谷区で開いた若年層向けの早朝からできた長い列を見て、私も認識を改めし、コロナ禍という時代で共

読者部では、「発言」欄に寄せられる読者の皆さんからの投稿に複数の担当者が目を通し、紙面に掲載する投稿を選んでいます。同時に世代別や地域別などで投稿本数を集計し、月ごとにまとめています。その記録を眺めていて驚きました。今年1月から8月まで8カ月連続で、毎月の投稿本数が1000通を超えていたのです。新型コロナウイルスの感染

2021.9.19